

小・中学生 平和作文コンクール



大崎市では、差別や偏見、争いのない平和な社会を構築していくための取り組みの一つとして、子どもたちの平和に対する思いや考えを発表する「小・中学生平和作文コンクール」を毎年実施しています。今年度は、小・中学校から百六十二作品の応募があり、審査の結果、最優秀賞として小学生の部では古川第四小学校六年 佐々木文香さんの「平和への一歩」が、中学生の部では古川中学校三年 角田萌さんの「平和について思うこと」が選ばれました。今回は、最優秀賞に輝いた二つの作品を紹介します。

◎ 政策課 ☎2129



★小学生の部 優秀賞

古川第一小学校5年 佐々木 由衣さん	未来へ伝えたい
古川第一小学校5年 佐藤 樹々さん	人々を苦しめた戦争
長岡小学校6年 佐藤 亜依さん	くり返してはいけない戦争
東大崎小学校5年 鹿野 修司さん	わすれてはならないこと

★中学生の部 優秀賞

古川中学校3年 一関 愛海さん	平和について
古川西中学校1年 川嶋 正太郎さん	戦争について
古川南中学校1年 松本 優さん	戦争と平和を考えて
古川南中学校3年 鈴木 絢乃さん	戦争

平和への一歩

小学生の部 最優秀賞

古川第四小学校六年

佐々木 文香さん



今、ここに私がこうしてられるのは、世の中がおだやかで戦争のない国、日本にいるからだと思います。今年で終戦六十四年目を迎えた日本ですが、いくつもの悲惨な戦争で悲しい涙がたくさん流されてきたからこそ私達の平和な暮

らしがあるのだと思います。私は、教科書やテレビなどから戦争とはどういう事なのかを学んできました。国のために若くして命をささげた人達、一日だけしか結婚生活を送ることのできなかつた花嫁さん、父親の顔も知らずに生まれてくる子供達。私の心の中にはこんなにも悲しくて、どうしようもない思いは一つもありませんが、そういった思いを胸にかかえて生きるしかなかつた人々はどんなに戦争をにくんだ事でしょう。日本国のためと、若者達が戦争に出兵しなければならぬその時の気持ちは一体どんな思いだったのでしょうか。私の母が、私のひいおじい

さんの話をしてくれました。私のひいおじいさんは、二等兵で十九歳の時に国から出兵の命令が出たそうです。その時の写真が今でも残っていて、ひいおじいさんを見送る両親の顔はとても悲しそうでした。よく見ると、ひいおじいさんのかたには大きなたすきがかけられていて、それには自分の名前と『おめでとう、ばんざい』と書かれてありました。ひいおじいさんは戦争の話を多く語らなかつたそうです。でもこの話を母から聞いて戦争のおそろしさがよく分かりました。

物もなく野ねずみをつかまえて食べていたそうです。ジャングルの中で高熱が出た時は、ミミズをにて飲むと熱が下がったそうです。ひいおじいさんの部隊は日本が負けた事を知らずにボルネオ島の海の中に三日間、鉄砲を頭の上に置いて殺されるかもしれな

二度と、くり返してはならない戦争、多くの人達が流した涙を私達は決して忘れてはならないのです。戦争によって心にも体にも傷をおつてしまった人達のためにも、この世の中から戦争というおろかな争いを無くしていかなければ平和はやってこない気がします。戦争でとうとい命を亡くされた人達の分まで私達が平和という輪をつなげていけたらと心から願います。

平和について思うこと

中学生の部 最優秀賞

古川中学校三年

角田 萌さん

毎年、八月になると、テレビや新聞が六十余年前の日本の悲劇を取り上げ、特集を組んで報道する。大好きな映画番組なども戦争のテーマ一色になり、残酷で悲惨な画面が嫌でも目に飛び込んで来る。アニメだから喜んで、「火垂るの墓」に、「はだしのゲン」を小学校の頃、テレビの前に座り真剣に観て気分が悪くなつたことがある。先日は、「戦場のピアニスト」という映画が放送されていた。シヨパンのうっとりするようなピアノ曲で始める映画だが、

る建物の中を逃げ回る…という画面に一転する。私はこの衝撃的なシーンが苦手で、二年前観た時は五分程で断念した。また、この映画同様に気になりながらも、どうしても読めない一冊の本があつた。わずか十五才でこの世を去つた悲劇の少女「アンネ」の本だ。彼女の名前はあまりにも有名で、どんな生涯だったか大筋知っていた。二年間もの間、屋根裏で地獄のような生活を強いられたあげく、捕われの身となつて収容所に送られ、そこで二度と自由を手にする

と腹立たしくてならなかつたが、ふと自分の置かれた境遇を思った。毎朝静かな朝が訪れ、食卓には食べ物があり、明るい太陽の下、青い空を見上げながら学校に通える。学校では友達とおしゃべりをして、放課後は大好きなサックスを思いきり吹ける。そして、毎日、大好きな人たちが笑っている。これがアンネと同じ年を生

も食べ物に困り、水たまりのカエルの卵をすくつて煮て食べた話や、雑草はもちろん飢えをしのごため、ヒバと言う、匂いをかぐだけでも精一杯の臭いイガイガした木の枝を、ガムのようにかみ続けた…という話が忘れられない。この話を聞いた時、遠い昔の消えかかろうとした悲劇的な事実が自分のことのように思えたのを覚えている。

この夏、嫌いだつた戦争の映画を見て、気が重くて読めなかつたアンネの本を読んで目がさめたように思う。「戦争を起すのは、たしかに人間。しかし、戦争を許さない努力ができるのも人間」これは、沖繩の平和祈念資料館の「アピール」だが、私は、これからどんな事にも目を背けることなく、他人事に思うことなく、この「努力」を忘れずに生きていこうと思

二、三分もしないうちにきれいなピアノの音色は砲声に変わり、優雅な演奏をしていたピアニストは砲弾で崩れかけ



屋根裏で地獄の生活を送っていた年齢だ。同じ年代に、激動の時代を悲しい運命を背負つて生きた…と思うと、彼女のことは、今、全て知っておかなければ…と、ハラハラしながらも、その生い立ちを一部始終読むことにした。読み終えた時、アンネの無念さと思うと本当に悔しくならなかつた。戦争が憎いと思つた。迫害なんて許せない

本の内容と比較しているだけに、一方はまるで小説のような錯覚を抱いてしまう。しかし、戦争とはそうではないと言ふことを存分に思い知らされた気がした。実際に、親せきにも戦争体験のある叔父がいて、話を聞いたことがある。六十年経つた今でも悲惨な記憶は鮮明で「思い出したくない」と目をうるませ、語っていた。中で

アンネの本の一部に、「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」とあつた。私のことだと思つた。事実、先日パレスチナのガザ地区の現在取材したニュースを、「見たくない」とチャンネルを換えたし、毎年放送される終戦記念日の式典も他人事のように見ていた。



11月2日に平和作文コンクールの入賞者を表彰しました